

■症例（フィクション） P.V 氏 75 歳 男性 京極町在住

65 歳まで働いていたが、引退後は自宅で家庭菜園をする程度であった。妻と二人暮らしで、二人の子どもは長男（38）は大阪で会社員、長女（36）は旭川で公務員をしていた。それぞれに家庭を持ち、年 2 回くらいの頻度で帰省していた。

もともと非社交的な性格で、地域の町内会の役員などは引き受けないタイプであった。

X 年 6 月、妻が心筋梗塞で突然亡くなった。大阪にいる長男と一緒に暮らそうと誘ったが、「大阪には行きたくない」と拒否した。「まだまだ元気に一人でもやっつけていける」と一人暮らしを宣言した。住み慣れたところがいいのだろうと家族も納得し、P.V 氏の一人暮らしが始まった。最初の冬は心配で時々様子を見に行っていたが、除雪もきちんとされていて家の中も片付いていた。

今年（X + 1 年）は雪も多かったので、除雪がきちんとされていなかった。そう言えば最近顔を見ていないことを思い出して、久しぶりに P.V 氏の家に行ってみた。元気そうに迎えてくれたが、部屋は万年床で台所も片付いてはいなかった。「山田さん、お久しぶり」と挨拶したが、私は山田ではなく鈴木である。

さあ、鈴木さんどうします？

P.V 氏が地域で生活するには、何が必要でしょうか。

※鈴木さんの人物像

京極町役場勤務 43 歳 男性

最近、税務課から住民福祉課に異動したばかりで、高齢者や福祉の担当者

グループ A

●全体的な意見

- ・この1年間で、雪かきや家事が面倒になってきた。
- ・1人で食事をとる→孤独、寂しさ。
- ・「生きがい」がなくなった。
- ・仕事一筋で生活してきた男性は弱い。
- ・家族や親戚はいないのか。
- ・近所の人はいつ気が付いたのか。
- ・山の中に住んでいるのか？田舎と都会では違いがある。
- ・鈴木さんも1人で考えず、誰かに相談した方が良い。
- ・鈴木さんの年齢は？→補足：43歳 男性
- ・認知症の心配はある。
- ・遊びに誘うべき。

●「生きがい」について

- ・家庭菜園で作った野菜をお裾分けしてもらう。
- ・他人と交流できる機会を作る。
- ・身内では出来ないこともある。

●鈴木さんに出来ること

- ・妻や子どもと畑を手伝いに行く
- ・家族に連絡することは必要。意外と家族は気が付かないことが多い。
- ・介護保険は×。
- ・町内会に呼びかける。

●京極町のサービス

- ・地域包括支援センターの職員による訪問
- ・除雪サービス
- ・電話サービス
- ・配食サービス
- ・町内会の利用
- ・京極温泉の利用

グループ B

●全体的な意見

- ・徐々に人が来なくなり、活気が無くなっている。
→外に出てもらおう、老人クラブに誘う、会話を増やす。
- ・不都合がないか確認する。
- ・始めは元気だったので安心してしまい、あまり訪問しなくなる。
- ・鈴木さんはプロではない。
→専門的な知識を持った人に相談する。
隣人として出来ることから始める。
- ・除雪が気になる。
- ・今はどうか確認するために、まず声をかける。
- ・普段の付き合いにもよるが、声をかける。
- ・今後認知症となりうるかもしれないが、現時点では判断しづらい。
- ・状態を定期的に確認する人が必要。

●生きがい作りについて

- ・テレビばかり観るのも、本人が良ければ決して悪いことではない。
- ・会話の機会を作る。
- ・本人が少しでも好きだったことがあれば、それを助長するように関わる。
- ・家族が時々顔を出し、話し相手になる。
- ・過去の人生を把握することが大事→家庭菜園
- ・温泉やパークゴルフ、また福祉センターの活用。

グループ C

●全体的な意見

- ・行き来できるような家はあるのか。
- ・75歳の頃は極端に変化する時期なのか。
- ・職場はどのような所だったのか。
- ・定期的な集まりはあるのか。
- ・鈴木さんでは手に負えないから、福祉センターに相談に行くべき。
- ・妻が先に亡くなると、周囲との付き合いがなくなる。
- ・パークゴルフはやっていたのか。
- ・冬になるとやることがなくなる。
- ・こうなる前に、元気なうちから交友関係を作っておくべき。
- ・サービスに繋がるまでに、何か出来ることはないか。
- ・男性の1人暮らしは、想像がしにくい。
→おかずを作って持って行くなどは女性には持って行きやすいが、男性にはやりにくい。
- ・理由がないと家には行きにくい。
→夫婦で行くべき。
- ・P.V 氏の子どもに相談するべき。
- ・名前を間違ふ時点で「あれっ？」と思うべき。
- ・年2回帰省する子どもに、もう少し多く帰ってきてもらう（定期的な電話も）。
- ・子どもに様子を見てもらってから病院に行く。
- ・まだそんなに認知症が進んでいない人では。
- ・もう少し外に連れ出して、人と関わったら様子は変わらないか。
- ・昔は郵便局員が配達時に安否確認をしていたが、現在は個人情報との関係で福祉との繋がりは難しい。
→もっと自由に声をかけられる人がいれば良い。
- ・鍵をかける人が多くなって、周囲との繋がりが難しくなった。
- ・いつも足跡のある家から足跡が無くなっていた。
→窓から見ても見えないので、家に入ったら亡くなっていた。
→普段と違う様子があれば町内会で気付く（電気・足跡等）。
→度が過ぎるとお節介になってしまう。どこまでしてあげたらいいか。
- ・町内会長に相談してはどうか。
- ・P.V さんの子どもなどの連絡先が分からないから、皆に話して皆で見守る。
- ・鈴木さんは福祉課に異動したので、調査の一環で訪問できないか。

土田 Dr.総括

- まず、認知症なのか。病院は必要か。
 - ・「万年床」「台所が片付いていない」「除雪がされていない」くらいで、認知症と判断するのは早い。
 - 鈴木さんを山田さんと呼んだ。
 - ・間違っって呼んだときの P.V 氏の反応や、その後の交流から病的なものなのか判断できる。
 - 「日にち」が大切。
 - ・退職前は日にちや曜日に敏感だが、退職後は分からなくなりがち。
例えば、分別ゴミをしっかりと決められた曜日に出しているか。
 - 妻の突然死
 - ・亡くなった直後はパニック状態。時間が経過するにつれ、孤独感、喪失感が出て、抑うつ状態にもなる。
 - 「生きがい」
 - ・人それぞれであり、どのように作れるのか研究が必要。
 - ・1人で朝から晩までテレビを観ている。
→本人が良いのなら問題はない。本人の価値観を大切にする。
 - ・若い時からしている好きなことを生きがいに。
→無趣味なら趣味を作ってあげるべきだと思う。
 - ・話すことは毎回同じで昔話だが、話し相手になる。
 - ・過去の人生に「生きがい」のヒントがある。
 - 「サービス」の利用
 - ・介護保険、除雪サービス、配食サービス、訪問サービス、町内会の利用
 - ・京極では、温泉、パークゴルフ、福祉センターの利用などがある。
 - 家族との繋がりがあるのであれば、家族に良い情報を伝えてあげる。
- ◎今回の事例は練習で認知症のケアは学習が必要だが、実際やってみると楽しいかもしれない

前沢 Dr.総括

- 鈴木さんが1人でケアするのは大変なこと。
地域の資源（人材）・一緒にケアしてくれる人を考えてみる。